

牧師室から (2020.8.2)

今年の梅雨は長い。水害に遭った人たちはなかなか終わらない雨に、眠れない夜を過ごしているのに違いはない。新型コロナ・ウィルスのこともある上、日曜日の雨には、教会に来られる方々の足元が危なくはないかと、この頃は気になることが多い。そして、洗濯物が干せない、ワンちゃんの散歩をいつするかという、ある面贅沢な悩みまで重なり、気分が晴れない日々である。

少女時代は雨が大好きだった。雨の中を傘もささず、歩き回ったこともある。その時は、すべてが可能性に満ちているように見えたり、ときには底知れない不安と苦しみにもがいていた。そのときのように、年取った今も、そのときと変わらない心の底に潜んでいる悲しみが顔を出す。空に広がる夕日の美しさをみながら涙を流し、雪が積もって白くなった世界を眺めながら、秋の落ち葉を踏みながら心の痛みを覚えたそのときのように悲しくなる時がある。夏の海辺の炸裂する太陽の下、そのまぶしい明るさの中でもなぜか悲しい。なぜだろう。楽しい思い出も甘い記憶もなぜか悲しい。3月初めにデパートで流れるひな祭りの歌が悲しい。安らぎを感じさせるはずの母親の子守歌さえ切なく聞こえる。喜びのときも、幸せの時間にも涙もろくなる。このような感情はわたしだけではなく、だれもが多かれ、少なかれ感じているのではないだろうか。

試練と苦しみの絶えないこの世で、本来の故郷を失いさすらう者になっている私たちには、主の安息の地に至るまで、悲しみはつきものであるのかも知れない。しかし、主によってその悲しみを越えるほどの恵みと平安が、私たちの人生の旅路に与えられているのだ。

今日も、曇りが広がった空を見ながら、讃美歌 460 番(21)を心で歌ってみる。
「やさしき道しるべの 光よ、家路はなおも遠く 日は暮れ、さびしくさすらう
身の 行くてを 照らしたまえ。・・・」

(鈴木善姫牧師)